



## ご挨拶

---

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第三十四号

2023/05/01 発行

題字：高橋弘美

平凡社の中国古典文学大系全六十巻を勢いで買ってしまった。この叢書には書経、詩経をはじめ司馬遷の『史記』、玄奘の『大唐西域記』、『西遊記』に『金瓶梅』、『水滸伝』に『三国志演義』…と中国の哲学や古典文学のおおよそが納められているわけだが、なにしろ六十巻もあるので、まあ読み終わるまでに十年はかかるだろうと思ってひそかに含み笑いなどしているのである。

ところで今後の十年だが、いろいろあって、四十以降の十年は余生だと思ふことにした。体のどこにも異常がなく、なにもしないでも健康でいられ、好き勝手してもどこにも支障が出ないというような肉体の頑健さを保てるのは、おそらくあと十年ほどが限度だろうから、その間、体でできることはみんなやろうというような考えでいる。こないだ四十半ばのいここに会ったが、老眼が進行して読書が大変だと云っていた。中国古典文学大系も、きっと道半ばでペースが落ちてくるに違いない。十年経ってもまだおめおめと生きているようなら、しょうがないのでそのときまた考えることにする。

## 今号の内容

経年変化

悟空と三蔵

後記に代えて

### 経年変化

上記のようなのんきな考えに陥ったのは、人間の体の寿命というやつが本来五十年か、いいとこ六十年くらいに設定されているに違いないという妙な確信を得てしまったためである。女性の閉経がだいたい五十くらいだとすると、人間は生まれて五十年くらいで本来持っていた機能を使い果たすのに違いないと、このあいだふと思った。自分の場合はそれまであと十年あるわけだが、四十になるという現実が迫ってきたとたんに、婦人科系の治療では三十代とはまるで別の対応を迫られるというようなことがあって、自分の体が少しづつ年を経てある種の終わりに近づいているのだというようなことを痛感したのである。

女性は年齢の変化がわかりやすくいい。男のようにならなくてもなんだかあまり変わらないというように鈍感にならざるを得ないに違いない。少

なくとも女性のような劇的な仕方に変化への対応を迫られる、というようなことにはなりにくいに違いない。

これがいいことなのかどうかは知らないが、個人的には二十代、三十代、四十代とちゃんと変化とともに時を刻んでゆけるというのはありがたいことに違いないと思う。こういうことは、三十代後半になるまであまり気がつかなかったのだが、考えてみたら非常にありがたいことに違いないのである。自分は精神の上ではいつまでも変わらないような気がするが、体がそうでないと云う。目が疲れやすくなり、生理周期にもなって頭痛や肩こりに見舞われやすくなり、わが体になんだかなにかしらの変化が起きつつあるということは、ここ一年くらいで少しずつ実感するようになってきた。

こうやって人は歳をとることを知り、それを受け入れるように促されるのに違いない。四十代以降の婦人科疾患の治療方針は、なるたけ生殖器を温存しようというようなこれまでの方針とは違ってくる。四十を過ぎれば、妊娠や出産の可能性はぐっと低く見積もられ、子宮などむしろ不要になってゆく臓器として摘出もいとわれないというような、最近では更年期治療との兼ね合いからそういうふうにも勧められることも多いようである。

自分の体の一部が役割を終える、あるいはそれに向かって変化しつつある、ということは、おそらく

自分の精神の一部もそうであるに違いないのだ。それがなんなのかと真正面から訊かれても困るが、そういう感じも含めて、来るべき次の十年が余生ではないかという確信に達したものと思われる。

別にになにかが完成したわけではないし、人格的に円満になったわけでもなく、むしろ年々悪くなっていつているような気もするのだが、それでも自分のどこかが懸命に開いていたのが、役割を終えて閉じつつあるのだというような感じはもっている。そこをちゃんと閉じれば、また別のどこかがしようことなしに開くに違いないというような感じもある。こういうものはみんな体の変化につられてわかってきたので、これがなかったら自分がどんなになつたかと考えるとおそろしい。十年後を考えるとおそろしいし、二十年後など大変なことになっていたに違いない。

変化の実感のない人間はおそろしい。いつまでも二十代三十代のようにだと思っている人間などなんだか始末に負えない代物のような気がする。それが生むエネルギーというものもまたあるだろうけれども、それよりも体というものの変化を、それがなにを云わんとしているのかを、いつも気にかける人間でありたいと思う。多分この次の十年でわたしの体は劇的に変わるはずである。それは三十代から四十代へ変わるのとは比べものにならない変化になるはずである。それにとまって、わが精神と人格とは

柔軟に変わってゆけるだろうか。そうであることを望むが、四十代以降余生というわたしの現在の確信が、その変化にうまくはまってくれればいいと願っている。

### 悟空と三蔵

中国古典文学大系を買って真っ先に読みはじめたのが『西遊記』だった。名前ばかり広く知られていて、孫悟空とか猪八戒とか登場人物の名前もそのパロディも巷にあふれているけれども、実際の『西遊記』がどんな話なのかは少しも知らなかった。

七十年代に、堺正章と夏目雅子の主演で西遊記のドラマをやっていた。全部ちゃんと見たわけではないが、なんとなく知っている。ゴダイゴのテーマ曲も知っている。ゴダイゴは昔からファンというわけではないがなんとなく気になるバンドで、ローマ字表記するとGodiegoだが、これは分解すると「God」「I」「Ego」になるといふ。

夏目雅子の三蔵法師は美しく心優しいお坊さんであるが、では原作の『西遊記』ではどうかというと、十世に渡り修行を積んだ徳高いお坊さまで、背格好や顔つきはまことに立派、その肉をひと口でも口にすれば不老長寿を授かることができるというので、

西方天竺への旅のあいだじゅう、数えきれないほどの妖魔悪鬼のたぐいに命を狙われる。

とこのように書けば、清らかで泰然自若、人格円満な坊さんを想像してしまいが、実際は全然そんなことはなく、風が吹けばおびえ、ちよつとした物音に腰をぬかして馬から転げ落ち、妖魔に遭えば命だけは助けをと平身低頭して懇願するも、なす術もなくさらわれてゆくというような、肝っ玉が小さくて小心者の、あまり役に立たないお坊さんなのである。

おまけにこの玄奘三蔵、ならば性格がよいか頭がよいかというと、どうもそうでもない。お供の猪八戒はご存じのとおり豚の顔した大食らいの妖怪だが、こいつは口先だけの愚か者で、てんで信用に値しないようなやつであるのに、三蔵はこの八戒の云うことをなぜかいつも鵜呑みにし、神通力広大で知略に長けた悟空の云うことは信じない。どうも乗せられやすく、知的にちと怠惰なふしがある。

それでは性格のほうはというと、やたらに情にもろく感激しやすく、感じやすく純朴でたまされやすい。本人がそのことを自覚してくればまだいいのだが、坊さん仏道を志すようなお方であるから、慈悲心は無量大、親切心も限りなしというやつで、悪意をもった妖怪が不幸な人間に化けて近づくとだまされ、これは妖怪の化けたので信用してはいけませんと云う悟空を叱りつけ、悟空が相手を殺して

もしようものなら猛烈に怒って破門してしまう始末である。

こんなのにつきあうのでは、悟空でなくてもいやになるというものである。三蔵がどうしてこんなトレンチカンの役立たずなのかということについて、西遊記の本文にこんな一文がある。

「三蔵は、もともと定見というようなものはない」つまり定まったこれという意見や見方というものはないということだが、これはおよそ宗教、なかなか解脫や超越を志向する宗教心というようなものを痛烈に皮肉っているようにわたしには思える。そもそもお釈迦様は、この世のもの、この世の見方ははじめとして、なにもものかにとらわれることを戒めたお方である。ひとつの意見に固執すれば、その反対の立場もおのずから生ずる。そのような対立の世界にとらわれているかぎり、解脫はあり得ない。莊子もまた、どこまでいっても互いに対立しあう宿命にある学説や意見など信用ならぬと述べている。唯一の一なるものを求めよ。対立を捨て、止揚し、寂滅の境地に立て。

このようなものを心から希求する、いささか形而上的な人間が、現実のなかではどのような立場に陥るか、どのように映るか、『西遊記』は描いてやまないようなところがある。宗教的な人間は概して心優しいことが多い。親切で慈悲深く、生きとし生けるものすべての安らぎと平和を願っている。しか



しそれは裏を返せば、小心者で優柔不断、外的なものに心を動かされやすく、対立を避けるためにこれという立場に立つことを避け、博愛主義に徹しようとするにでもいい顔をするために、結果として多くのものをだめにしてしまいがちだ、ということにもなる。そういう現実の「高僧」の姿を、西遊記の作者は三蔵を通じて容赦なく描いているように思われてならない。西遊記の作者がそれを意識していたかどうかはわからないけれども、この点は残酷なまでに成功している。

三蔵はおそろしく打たれ弱い。日が暮れば心細くなって泊まる宿を求め、今日は一日なにも食べないからひもじいとか云って悟空を困らせる。目の前に高い山があると見ればすぐに気がくじけて、とても越えられそうにないとか、いったいどんな妖怪変化がいるだろうとか云って心配してばかりいる。

ところで解脱への道においては、すべてこういうことをやめるように云っているのである。十世も修行を積んだお坊さんであれば、そうしたことは身にしみてわかっているだろうけれども、悲しいかな三蔵はひ弱な生身の人間であって、生身の人間にとっては、そうしたことはやっぱりできない相談なのである。

宗教者はよくおのれの愚と弱さを口にする。まったくその通りなのである。わたしも三蔵の愚かさ弱さがまるっきり自分のことのように、なんだか変

な汗が出てくるようなのだ。

ところがこの三蔵には、孫悟空なる無敵の、傲岸不遜の弟子がいる。彼は宇宙の気が満ち、陰と陽が交わって生じた岩から生まれた猿である。その生まれからして尋常ならざる存在だが、さらに出家して仙人のもとで修行を積んだことで、広大無量の神通力を得、ありとあらゆる仙術を使いこなすすべを身につける。体に生えている毛は一本一本が変化の道具となり、息を吹きかけて「変われ！」と叫べば何百という分身があらわれ、変化の術も自由自在でどんなものにも変身することができ、頭はいくら切っても叩いても割れない石頭、おまけに悟空のあやつる筋斗雲は、ひとつとんぼ返りを打つ間に十万八千里を飛ぶことができるというしろもの（筋斗はとんぼ返りの意である）。

こんな無敵の孫悟空であるから、勢い増長して天上天下唯我独尊とでもたまうような御仁にもなる。地獄へ行つて閻魔大王をきりきり舞いさせ、閻魔帳から猿という猿の名を消してしまったあと、「齊天大聖」を名乗り天上界にまで進出して秩序を大いに乱し、玉帝の放つ軍団もなんのその、みんなやつつけてしまい、その勢いはとどまるところを知らない。

そこで満を持して登場するのが釈迦牟尼仏であるが、お釈迦様は微笑んで、悟空にひとつ勝負をしようという提案する。

「そちに、わたしのこの右の手のひらから飛び出す腕があったら、そちの勝ちとする。もし出られなかったら、そちは下界にもどって、ただの化け物となり、何劫かのあいだ修行した上で、また技比べをする」といたそう」

そんなことならわけないと雲に乗って飛び出した悟空、世界の果ての五本の柱へたどりつき、齊天大聖のサインをして、おまけにひとつ小便を引つけて戻ってくると、五本の柱と見えたものは、お釈迦様の尊い右手の指であった。なべて生きとし生けるものは、お釈迦様の手のひらの上で遊んでいるに過ぎない。すべてを手に入れ、すべてを極めたと思っただが、それははかない夢であった。

罰として五行山の岩の下に封印された悟空は、それから五百年、かの三蔵がそばを通りかかるまで、閉じこめられたままなのである。

なんだか長々と書いてきたけれども、この悟空と三蔵という関係が、なぜだかわが胸を打ってやまないのだ。悟空は生身の猿でなく、ひとつ飛びで十万八千里も飛ぶことができるのだから、三蔵のようなひ弱なのを守って、天竺まで徒歩で出てく旅をするという法はない。実際、物語の中で悟空は幾度も目的地付近まで雲で飛んできてはまた引き返す。これでは物語は破綻しそうなものだが、どっこい悟空はときどきはつとにするようなことを云う。

「お師匠さまは凡体肉骨で、泰山よりも重い。おれの乗る雲じゃあ、持ち上がらないんだ。おれはな、山を移し地を縮める法もすべて心得ている。しかしお師匠さまは、知らぬ国々を経巡らなければ苦海を抜けきることができない。おれたちは、お師匠さまの命を守ることができても、その苦しみを代わってあげるというわけにはいかない。苦勞なしで手に入れたものは値打ちがない、とはこのことさ」

三蔵にしてみれば、本人にはそのつもりがなくても、生身の重くもろい体を引きずって、それ以上に崩れやすく動揺しやすい精神なるものを携え、十四年にもわたる長旅を耐えねばならぬことそのものが、解脱に向けたひとつの試練なのである。本人にそのつもりがないというのがまた面白いところで、三蔵という単純な御仁は、ひたすら唐国の尊い帝のため、また衆生の救済のために、天竺より経を持ち帰ることだけを考えている。馬鹿のひとつ覚えのようにそのことしか頭にないので、この旅が自分にとってどんな意味があるのかなど、まして自身の救済などということはおおよそ考えてもみない。

ここに至って三蔵に、なにかこのうえない尊さのようなものが加わる。なるほど彼は打たれ弱く、ほだされやすく、だまされやすく、どうにも愚かである。彼はただお経を読むことや座禅することしか知らない。危機に瀕すれば不動心など忘れて自己保身に走り、容易に他人の意見に流される。けれどもそ

の彼の心には、誰にも、どうあっても侵せず動かしがたいひとつの尊さがある。彼はいつも望郷の思いに駆られ、故郷に帰りたいと思っている。それを悟空などはときどきチクリとやるわけだが、三蔵は故郷を思い、帝を思い、故郷の人々を思う。そして取経という目的を思い出す。三蔵は彼らの救済を思うのである。ありがたいお経によって、必ずや故郷にもたらされるであろう救済のことを思うのである。

他方悟空にとってみれば、この旅はまったくたのくたびれ儲けに相違ない。彼は封印から解かれるために三蔵の弟子になったので、心から望んで旅に加わったわけではない。しかしその一方で、道中数々の妖怪変化に出会い、勝負することをどこか楽しんでる。知恵をめぐらし術をこらして妖魔を調伏させることに、彼は楽しみを見出している。それは悟空という存在そのものが満たされる時であるのに違いない。彼はおのれの持てる力を存分に發揮して、妖魔と朝から晩まで飽きずに渡りあう。相手をめちやくちやに罵り、やっつけたりやっつけられたり。やっつければ大いに気をよくし、やっつけられれば怒りを燃やし、懲りずにまた立ち向かってゆく。

悪戦苦闘の果てに、ついに縛られてこそをかいである三蔵を助け出し、悟空の大暴れはおしまいとなるが、またすぐに師匠の命を狙う魔物が現れることを彼は知っている。彼は内心ぶつぶつこぼす……とんだものに関わり合いになっちまった。これじゃち

つとばかり退屈でも、故郷で仲間と食っちゃ寝していたほうがよっぽどましだ……。

でも悟空は、なんだかんだ云つても、三蔵を嫌いなれない。第一、三蔵は生身の人間である。弱ちいのはもとのことである。気が弱いのも致し方がない。彼は人間なのだ。役に立たないのもしようがない。坊さんなのだから。そんなものにかかずり合ってしまった自分を呪うべきだが、三蔵に助けられた恩義を感じている。彼を動かしているのは半ば虚栄心だが、もう半分では本心から三蔵を想っていたりする。

いったいに、三蔵の弱さがなければ悟空の強さはない。三蔵がいなければ悟空は自分の力を適切に發揮する機会を得られず、もてあまして暴れるだけである。そして悟空がいなければ、三蔵はなにもしできない。悟空がいなければ、三蔵は現実の前に手も足も出ない。ただおろおろし、心をすり減らし、泣きべそを作るばかりである。

三蔵はかなり長いこと、悟空を少々疑わしげに見ていた。悟空は血の気が多すぎる。悟空は頭が回りすぎる。弟子の言動はいちいち高僧の気に障った。純朴で単純な、世間知らずの三蔵には、悟空という存在そのものが仏の道に反しているように見えた。愚か者の猪八戒はどこかわいかった。なにかと反目する悟空と八戒とを、いつも「まあまあ」となだめにかかる沙悟浄を、安心して見ていられるゆえに

三蔵は無関心に見ていた。彼らはともに巡礼した：…かの天竺へ。三蔵は経をいたたくことしか考えなかった。弟子の三人は、無事旅が終わることだけを考えた。そして天竺でなにが起こったか？ 霊山の手前に川が流れていたが、そこを渡るとき、三蔵はひとつの死骸が流れてくるのを見た。彼は例によって少しも気がつかなかったが、それは実は三蔵の死骸であって、彼はこのとき解脱したのである。

悟空もまた仏となり、八戒も悟浄もそれぞれに位を授かった。こうしてめでたしめでたしとなるわけだが、巡礼とはなにかを、旅とはなにかを、こんなに考えたことはない。人はみな、自己を背負って歩かねばならぬ。自己と自己の肉体とをである。天竺をを目指すその一步一步が、俗世の塵芥にまみれ、邪心と欲目と虚栄とおののきに満ちたその一瞬一瞬が、そのまま解脱へ通ずるなにかであるのだとすれば。目的をでなく、ただ旅することを求められているのだとすれば。

苦難に際し、三蔵はなにもしなかったし、できなかった。念仏も功を奏さなかったし、いざというときにはそんなもの頭から消し飛んでしまった。彼は本人の思惑とは無関係に取経の僧として選ばれ、苦難に遭うことを求められたが、そこから自力で脱することは求められなかった。三蔵を危機から救うのは悟空の仕事で、三蔵はただ経をとるために旅することを求められただけである。そして彼らはおのれ

の役割に忠実だった。自分で選んだ役割ではないのだが、結局は性に合っていたのである。

三蔵が無事お経を手に入れ、唐へ戻ろうとする道中で起きた、忘れられない出来事がある。一行は水難に遭い、なんとか助かったものの、経を入れた袋はずぶ濡れになってしまった。そこで小高い崖の上へ登って、経を広げて乾かしていたが、旅立つ段になって、紙の一部が岩に貼りつき、どうしても取れないで破けてしまった。三蔵は自分たちが大切にできなかったからだと嘆いたが、悟空は笑って、「さにあらず、さにあらず。天地には欠けたところがあるのに、この経だけは、もともと欠けたところがありませんでした。いま貼りついて破れたのは、不全の妙理に応ずるもので、人力ではどうすることもできないのです」

こうして不完全なお経を抱え、無事唐の国へ帰って、彼らの旅は終わった。人力ではどうにもならなかった、多くのものを残して。

後記に代えて

最近、いわゆる心境の変化のようなものが多いので、この雑誌を今後どうするかというようなことに

についても少々考えをめぐらしていたりする。別になにか決着をつけようというようなことを考えているわけでもないのだが、この雑誌ももう三十四回ということは三年近く続いていることになるわけで、気の向くままにぼちぼち考えてゆくことにする。

このごろ絵を描いている。誰に見せるわけでもないのだが、手を動かしているうちに思いもかけなかった形に巡りあったりするのが面白い。もう余生なので、これまでよりいっくらか気兼ねなく遊べるわけである。実際、遊ばないと損だ。遊んでみないと、自分の本当の姿などわかるわけがない。人は遊ぶ生き物だ。学びとは遊びのことだ。この先も遊んで過ごしたいものだと思う。

二〇二三年五月一日

水澤雪下

<https://nijims.com/>



『西遊記』世徳堂本より孫悟空の図